

大過去の前景化効果について —時間的先行性を表わさない大過去—

春木 仁孝
(大阪大学)

大過去は教科書的には「過去における過去」を表わすと言われるが、小説などの語りにおいては時間的先行性を表わさず、当該文脈で自らに先行する半過去、単純過去、複合過去などが表わす事態に対して継起的な事態を表わしている場合がある。半過去に関しては過去全体をカバーできる時制であるところから、大過去が表わす事態よりも以前の未完了的な事態を表わすことがあることは知られているが、物語的半過去や単純過去に対して継起的な事態を表わす大過去が存在することはこれまで論じられることはなかった。本発表では中村芳久氏が提唱する認知モードの観点を導入して、Iモード的な語りの文脈において時間的に先行する事態を表わしていない大過去は、前景的な事態を表わすために用いられていることを示す。Iモード的な語りは、通常半過去の使用や物語的半過去の使用などによって構成されるが、本発表で問題にするような大過去そのものの使用がIモード的語りの開始となることもある。また、自由間接話法（または自由直接話法）的な語りによって構成されることもある。

発表では大過去以外の時制に関しても、Iモード的（そしてDモード的）な語りとの関係についても多少とも言及する予定である。